

まんだら通信

第246号 (通巻280号)

平成29年01月 西暦2017年 佛暦2583年 皇紀2678年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

ニッポン教

暮れの二四日は、イエス様のお誕生を祝ってプレゼントを鳴らし、大みそかにお寺で除夜の鐘に初詣をして、子や孫にお年玉という人も多かったです。ですが、あなたはいかがでしたか。

お年玉は儒教の慣わしです。うですから、四つの宗教が混じりあっていますよね。

私たちは当たり前のように、暮らしの中に色々な宗教が関

わっているというの、世界広しといえども、日本だけなんだそうです。

日本の至る所にあるご神木。神やご先祖が宿る霊山。少し前までは川や湖や、かまどや囲炉裏にも神様がいましたから、間違っても囲炉裏に唾をするなんてことはありませんでした。

私の師匠は、朝、井戸端で顔を洗うと、朝日に向かってかしわ手を打ち、西の方(伊勢神宮でしようね)を向いてかしわ手を打っていました。

誰でもみんな、そうだったと思いますよ。

こういう、神様はどこにもいるという信仰をアニミズムと言って、キリスト教のような一神教から見ると、遅れた程度の低い宗教なんだそうです。

そういわれると、普段は宗教など関心が無い、おおかたの日本人は愈々自信をなくし、肩身の狭い思いになってしまっています。

それでなくても、バブルがはじけて以来、出口が見えない不安が、何となく日本中に漂っています。

でも考えてみると、長い歴史の上に出上がった、文化とか伝統などというものは、そう簡単に変わるものではありませんし、変えるべきではないですね。

かねがねそう思っていたら、一月三日の産経新聞と読売新聞に元気が出るような記事があった。思わずひざを打ちました。

産経新聞の『産経抄』の初夢で、大統領のブッシュさんによく似たアメリカ人と、サダムさんによく似たイラク人が話しかけていたそうです。

片方が「諸行無常」とか「融通無碍」などという、大統領のサダムさん似のイラク人

は、「和を以て貴しとなす」などと言っているのだそうです。

ご存知のようにアメリカはキリスト教、イラクはイスラム教で、どちらも神の正義を振りかざして、一歩も引きません。

その初夢は、世界中の人たちが、どんな宗教も和氣藹々と仲良く暮らせる『ニッポン教』に改宗して、ハッピーエンドになるところで目が覚めた、という話でした。

読売新聞には、永六輔さんのお話が載っています。

《あらゆる宗教がごく普通に生活習慣になっているのは、世界の中で日本だけです。宗教観が低いんじゃないか》と恥ずかしく思っている人が多いようですが、大間違い。全世界に誇つていいことです。

イラク、イスラエル、パレスチナ…。

宗教と宗教が戦って多くの血が流れている。

その中で日本は、すべての宗教がみんな仲良くしている。日本人はこのことを世界に知らせるべきですよ。小泉さんや川口(外相)さんは国連に行つて「日本を見なさい。あらゆる宗教が共存している。ここに世界平和のサンプルがあります。」と胸を張って演説したらいい。これが世界平和につながる一番の方法ですよ。と。

正直である、物を大切に、辛抱、思いやりといった縄文以来の『日本人のこころ』が、お子さんにとって一番の財産。

これをしっかりと伝えることが出来れば、あなたの老後の安心は保証付きです。

この記事は平成一六年一月、第九号に掲載したものです。あれから十三年過ぎましたが、首相や外務大臣が違ふ他は、世の中の有り様は全く変わっていません。むしろ安倍さんという、日本の心を人一倍大切に首相が現れて、世界と日本を良い方向に向かわせる機会が確かになりました。折から、ガキ大将のように、腕っ節の強そうな、トランプさんというアメリカ大統領のせいで、世界が困惑している時だからこそ日本お家芸の「和」の心の出番だと想いませんか。

にっぽん人情小噺 三遊亭鳳豊 第一〇〇話 命の花見

今年の三月三十一日のことでした。上野公園に三人の男が集まりました。ひとりには、元大学教授の松本肇さん。もうひとりには私。そして、最後のひとりが大辻慎吾さん、東映の元俳優です。私が、大辻さんとお会いするのは三回目、松本先生とははじめてでした。大辻さんと松本さんも、それほど親しくはないように私には見えませんでした。

時間は、まだ夕方の五時です。

「ちよつと、そこらで飲みますか?」

三人は静かに繁華街の方へ歩きはじめました。それほど深い関係のない三人が、なぜ会うことになったのか。それは、大辻さんのこれまでの人生に松本さんと私が共感したからでした。

私と松本さんを結びつけた一冊の本があります。大辻さんがお書きになった自伝『赤落ち』です。「赤落ち」とは、一審、二審と無罪を主張し、検察と戦いながらも、二審で有罪の判決が出ると、最高裁への控訴を諦め、刑務所に入ることを表す刑務所言葉だそうです。ということは、この著者、大辻慎吾さんは単なる元俳優ではなく、「前科者」だということです。その犯罪も、本によれば、強姦致傷の罪です。彼は、そのため、四年間の刑務所生活を送ったのです。なぜ、大辻さんは一審、二審と無罪を主張したのかは、自伝のなかに詳しく書いてありますが、いわば、彼氏持ちの女性に手を出したため、その女性が結婚を約束している彼のために言い逃れをしたこと、大辻さんは、加害者にされたようです。

三重刑務所、名前なし、囚人番号七百七十三番。それが大辻さんの呼び名でした。刑務所初日、職員が中央の机の上にあぐらをかき、七十人ほどの囚人が整列して監視をするなか、大辻さんら新しく刑務所に入ってきた者は五十メートルもある廊下を乾いた雑巾で十往復

も乾拭きさせられました。ある者は目から泡を吹き、またある者は激しく咳き込むと、一気に血を吐いたそうです。そして、これが三カ月の間、毎朝続いたと言います。これを刑務所では「地獄の一丁目」と言うのだそうです。

そして、囚人番号七百七十三番は、四年の間に何十人という仲間の死体を目にしますが、その八十八%は引き取り手がいないことも知ります。そうした男たちは、刑務所内の無縁仏の墓に埋葬されるのだと気がつきます。また、囚人頭に嫌われたら最後、食事当番によっておかずが奪われ、トイレで尻を拭く紙も半分になることもわかりました。また、囚人のなかに刺客がいて、理由はわからないまま、殺されそうになったこともあったそうです。

そして四年、大辻さんは晴れて刑務所を出所しました。その後、大辻さんは茨城県の龍ヶ崎というところで、焼き鳥屋さんをはじめました。

見知らぬ土地で、「前科者」がはじめた焼き鳥屋です。それでも、地獄を味わった元俳優にとっては、人の情けが身に染みただけでしょう。恩返しとばかり、地元の人たちの人生相談に乗ったりしているうちに、市役所の人たちにも知られるようになります。「酸いも甘いもわかる焼き鳥屋さん」として、市内では知られるようになります。

そのうち、自伝を書かないかという誘いに乗って書いたところ、自費出版だと言われ、二百万円要求されたそうです。大辻さんは黙って要求を飲み、知り合いから借金をして払いました。だが、本も出ないうちにその出版社が倒産。また、金を借り、別の自費出版社から出したのが、『赤落ち』でした。その借金は、何年もかかって返したそうです。

私は、なんだかこの元俳優に会いたくなって、五年前、龍ヶ崎を訪ねました。大辻さんは、実に苦味ばしつたい男でした。名優ユル・プリンナーを日本人にしたような顔で背も高く、「いらっしやい、何にしますか。」という低い声がまた魅力的でした。その時、大辻さんがこうつぶやいたのが忘れられません。(嘶家さん、俺、もう一度だけいい、人の前で芝居がしてえ……)

元筑波大学教授の松本さんも、龍ヶ崎市内で買った『赤落ち』に感動して、酒も飲めないのに、大辻さんの焼き鳥屋さんをのぞいたのがきっかけだったそうです。そして、何度か通っているうちに、役者としての夢を聞いたのだそうです。

それでも、大辻さんは、刑務所を出てから十数年間、俳優を諦め、ずっと地味に働いていましたが、二年ほど前、原因不明の病気で左半身が麻痺し、仕事ができなくなっていました。

(ああ、とうとう、俺も終わりだ。一生懸命生きてきたけど、かあちゃん、もうダメだ) 大辻さんは、何年も前に亡くなった北海道のお母さんのことを思い出していました。父親が早く死んだので、少年の大辻さんを連れて再婚したお母さんは、いつも義父に殴られていたと言います。

中学を卒業した大辻さんは、仕事を求めて上京します。その時に、母が持たせてくれた三個の塩むすびがいまでも忘れられないそうです。大辻少年は、そのおむすびを食べます。一個目は青森から汽車に乗ってすぐに、二個目は「まもなく上野です」というアナウンスを聞いた時、そして最後の一個は、上野に着いて寝る前に食べたそうです。

それから、キャバレーのボーイからはじまり、転々と職業を変えているうちに、演劇の世界に入り、奇人と言われた二代目大辻何郎の弟子になり、大辻慎吾の名前をもらい、その彫りの深い風貌から悪役として東映映画で活躍をはじめた矢先、女性にひつかかってしまったのです。

今年の十二月で古希を迎える年になるその大辻慎吾さんが、いま、再起をかけてリハビリをしていると電話で教えてくれたのが、松本さんだったのです。

「じゃあ、上野駅で三人で会いましょう」ということになり、全員集合となったのです。「大辻さん、ひとり芝居をやりませんか、台本を書くのが松本さん。僕もできることはし

ますよ。みんな、人生の最後の力をふりしぼって、やりましょうよ。」

「いいですね、僕も教授を退官になって数年、このまま何もしないで死にたくない。大辻さん、絶対、やろうよ。もう一度、お互い、自分の人生の最後の花を咲かせようよ。」

冷静沈着な松本さんが珍しく興奮してそう言うとき、大辻さんは動く右手で目頭をぬぐって、こう言いました。「嘶家さん、俺の芝居をぜひ見てほしい人たちがいるんだよ。」

「誰ですか。」「龍ヶ崎市役所の人たちだ。普通、市役所の人たちは、前科者なんか相手にしないよ。だけど、あの人たちは本気で俺の相談に乗ってくれるだけでなく、励ましてくれるんだよ。がんばれ、負けるなつてさ。だから、俺、必死でリハビリがやれたんだ。だから、どうしてもあの人たちに、がんばって生きていく俺を見てほしい。嘶家さん、ありがとな。生きる勇気をくれて。今日は、いい花見になった。命の花見だ。」

ふと、私は、友人の俳優、柄本明さんが言った言葉を思い出しました。

「僕はね、これまでやってダメだったこと、失敗したことはいくらでもあるけど、やらないほうがよかったということは一度もないよ。」

(よし、もう一度、突っ込んでボールを奪いに行ってみるか!)

元ラグビー部の私は、ふたりと別れたあと、上野の山の夜桜に向かって、そう叫んでいました。

この人情小断は先月号の『焼鳥屋さん』の続きに当たります。

一連の人情小断をお書きになった三遊亭鳳豊さんは、聞き書きの名手で日本全国を飛び回って、たくさんの人々のお話を聞いてお書きになつていきますから、その人の息遣いまで読み手に伝わります。

しばらくは、前に掲載したお話を再掲することになりますが、初めて読むのと変らない感動を覚えることでしょう。

▼2月。如月。あつという間の1ヶ月でしたが、お元気にお過ごしでしょうか。▼2月はお釈迦さまお涅槃の月ですね。

北インド、クシナガルの寒々とした郊外の、沙羅の林で、急を聞いて駆けつけたお弟子や村人に最後の教えを説き続け、「私亡きあとは私が説いた教えを守って励むように。」と逝かれました。

1ページの涅槃仏は、孫、龍祐と釈尊の最後の旅をなぞってインドに行った時、ブッダガヤで求めたものです。真鍮製、35歳ほどの重さがあります。年齢的にも、もう行けないかも知れないので、空気の匂いやむとす温度など、思いでのよすがになります。▼『それでもこの世は悪

くなかった。93歳、初の語りおろし人生論』(佐藤愛子 文春新書) 作家で極め付きの美人さん。自分の責任でもないのに、行きがかりで背負い込んだ山のような借金を、男勝りの豪快さでアハハと笑い飛ばし、夜を日に働いて、そして気づいたらいつの間にか、流石の借金の山が消えていたと。

言われて見れば、人間誰でも似たような災難はありますよね。

「苦しいことが来た時にそこから逃げようとする、もっと苦しくなる。」ってホントだなと納得できました。▼今月はゴールデンシャワーツリーです。マメ科ナンバンサイカチ属 和名で南蛮槐。インド原産の半常緑樹で英語の名前通り、こがねのわか雨が降り

注いでいるような、はっと息を呑む美しさがあります。

写真はスリランカ北部のお寺の境内のものですが、たくさん見かけるといほどではないようです。近縁種に日本固有のサイカチがあります。こちらはジャケツイバラ亜科サイカチ属だそうです。

『六軒町のサイカチの木』は、平成26年2月26日、館山市指定の天然記念物になっていますからご存知の人も多いのではないのでしょうか。場所は館山駅から中央公園に向かう途中の十字路です。指定のいさつなどは館山市のホームページで詳しいことが分かります。

2017.02.09 龍渉



